

---

# 願病

七紙

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願病

### 【Nコード】

N3578M

### 【作者名】

七紙

### 【あらすじ】

現代社会において、携帯はもつとも優れた情報手段であり、もつとも身近な機器である。

ネットワークを介した犯罪”願病”撒き散らす犯人を追い詰め、逮捕せよ。

人を殺す、ネットワークシステム。

願いを叶える、ネットワークシステム。

どちらも同じで、どちらも違う。狂ったように見てしまふ。使ってしまう。

悲しいほどに依存している、それはもう恋人同士がするように、薬物に対する中毒のようには、重く苦しい病のようには。

## 依頼（前書き）

この小説を見て、楽しんでいただける方は多少やんでいる方が多いと思いますので、お気をつけを（笑

気分を悪くするほどリアルな描写は、書かないというよりは書けな  
いため、安心して、見てください。

文学としては、拙いし、あまりうまく書けていないと思うので、大  
きな寛大なお心と少しダークな気分で読んでみてください。

## 依頼

私に依頼してきたのは、長身で聡明な印象を受ける、30代半ばの男性だった。どこかの教授といっても、通りそうな印象を一目見ただけで受けた。

私の探偵家業というのは、自己紹介をかねて言うと、父親の開業した探偵事務所が始まりだった。父は、最初は探偵家業がうまいわけではなかった。どちらかというと、浮気捜査を主にしていて、父としてはそこまで誇れる人物ではなかった。しかし、すごいのは父親の人脈だった。警察官のトップの補佐と飲み友達として何度も小生ながら、捜査談義を何度聞かされたわけではないし、地元駅近くの商店街では、ほとんどの人が顔見知りで、異常なほど人気があった。探偵家業から帰ってくるたびに、野菜、果物、肉、魚、日常に必要な食品は、商店街の人が当時4人家族だった私の家では到底食べきれない量をいつももらってきていた。私が生まれるずっと前には、父は地域で一番のイケメンで考えられないほどもてていたらしい。本人の自称なので信用はしていないが・・・

話が長くなりそうなので割愛

今は、私一人で探偵家業を行っている。家には、今年高校生に成ったばかりの妹がいるのだが事務所をプライベートは別にしてあるので、ここ数週間かは帰っていない。仕事を立て続けに、唐沢のヤツに押し付けられたせいだ。

唐沢というのは、高校のときの同級生で唯一親友と恥ずかしげなく呼べる男である。体格は、レスラー並みにごつく、髪の毛は剛毛のせいもあって、短く刈り込んでいる。20代前半だというのに渋い印象を受ける男だ。その影響なのか和風・和柄なものを好み、茶道、三味線、書道をたしなみ柔道・剣道も得意とする本人からすれ

ば普通だと思っっているようだが、始めて見る人は度肝を抜かれるほどうまい。刑事課に配属されてからは、出世コースを順当に進み今では軽侮にまで昇進した。異常な若さというのもあってあまり上のかたがたからは気に入られてはいないようだったが。まあ、ほとんどが俺もかわつての合同捜査によって解決の糸口がわかっているものが多いためアイツは壁にぶつかると俺によく”依頼”という形で捜査協力という大義名分の下堂々と解決策を聞いてくる。別に嫌いではないからいいのではあるのだが。

余談に流れやすいのでさらに割愛

依頼してきた男の名は桂木亮一という名前だった。

飯沢家に住み込みで、住ませてもらっている居候だという。依頼の内容は最近奥さんの様子や、娘さん二人の様子がおかしいらしい様子のおかしくなってしまった原因を突き止めてほしいという内容だった。

内容だけ聞いていると、迎え入れたときの興奮と陽気混じりだったモチベーションが下がっていくのを感じた。依頼内容がくだらないようだったら、さっさと追いつ返してしまおうと考えていたときだった。

「似ていました・・・」

聞き取れるかわからないくらいの小さな声でそうつぶやいた。

「あの目は私の父と同じ目だった！あんな目はおかしい！だって、そうじゃないかも終わったはずなんだ。あんな目をしていちゃいけない。あんな目を持っているやつを許しちゃいけない。殺さなきゃ。俺が死んでしまうんだから。」

徐々に怒鳴り声に近くなっていき、言い終わった後は抜け殻のようになしよくれた様子のままうつむいていた。

「あなたのお父さんは、昔なにかあなたにされたのですか？」  
できるかぎり、胸の中の興奮を抑え、声色を変え、親切を装った

様子で聞くと男は安心したのか話を再開し始めた。

「父親は、酒に弱いくせにしょっちゅう酒を飲んで、暴れて、拳句の果てには、薬にまで手を染めて、反論なんてものをしようものなら動かなくなるまでよく殴られました。」

依頼人の愚痴を聞くのはここからが捜査を始めるのだという不可思議な高揚感に襲われる。至福の瞬間だ。内容がくだらなくても、一言一句覚えようと耳を必死に傾ける。

「そのときの目と、今の奥さんとお嬢さんの目がよく似ているんです。何とかして、助けてあげたいんです。力になってくれませんか？」

懇願し、頭をたれている彼をみながら私は、「依頼を引き受けましょう、後に正当報酬をいただきますね。」開いた同行と口の端がつりあがった笑みを隠すことなくきっぱりと言った。

## 依頼（後書き）

長々とだらだらした文だと思うので多少のことはご勘弁を  
これから少しずつ、なれて、更新率を上げてたくさん書いていき  
たいと思うのでよろしくお願いします。  
暇な方はまた訪れてみてくださいね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3578m/>

---

願病

2010年10月11日03時22分発行